

(様式1)

令和3年度 学校評価結果報告書(特別支援学校用)

(1) 学校教育目標	心豊かに、たくましく生きぬく人間を育成する。 (1) 進んで体を鍛える子 (2) 進んで学習に取り組む子 (3) 仲良く助け合う子 (4) 根気強く実践する子			学校整理番号	特2	
				学校名	青森県立八戸盲学校	
				対象障害種別	視覚	
(2) 現状と課題	(現状) 在籍児童生徒数は12人で、ここ数年は横ばいである。特別支援学校としては小規模校であるが、地域における特別支援教育のセンター的機能を果たしながら、視覚障害を主とした教育の充実に取り組んでいる。人事異動により、視覚障害教育の経験豊富な教員が数名となり、専門性の維持及び指導技術の継承が課題となっている。 (課題) 1. 学校教育目標の実現(1)健康で安全な生活を送ることができる習慣や態度を育てる(2)授業を充実させ、進んで学習に取り組む子・意欲的で主体性のある子を育てる、(3)道徳教育・特別活動・生徒指導・自立活動の充実に取り組む、仲良く助け合う子・協調性のある子・豊かにコミュニケーションできる子を育てる、2. 指導力及び専門性の向上、3. 全教職員の協力による学校づくり、4. 保護者及び地域の要請に応え貢献する学校づくり			自己評価実施日	令和 3年 12月 21日(月)	
				学校関係者評価実施日	令和 4年 2月 10日(木)	
(3) 重点目標	1 健康で安全な生活を送ることができる習慣や態度を育てる			(9) -イ 学校関係者評価委員会の構成 学校運営協議会委員5名、学校評議員8名		
	2 授業を充実させ、進んで学習に取り組む子・意欲的で主体性のある子を育てる					
	3 道徳教育・特別活動・生徒指導・自立活動の充実に取り組む、仲良く助け合う子・協調性のある子・豊かにコミュニケーションできる子を育てる					
	4 保護者及び地域の要請に応え貢献する学校づくり					
(4) 結果の公表	教職員には職員会議で資料を配布して説明した。保護者には参観日で説明する予定だったが、新型コロナウイルス感染症予防対策で中止としたため、資料を配付し、意見等を集約することとした。その他、ホームページにも掲載する。					
自 己 評 価				学校関係者評価		
番号	(5) 評価項目	(6) 具体的方策	(7) 具体的方策による目標の達成状況	(8) 目標の達成度	(9) -ア 学校関係者からの意見・要望・評価等	(10) 次年度への課題と改善策
1	健康で安全な生活を送ることができる習慣や態度を育てる	①一人一人の実態に合わせた生活習慣を身につけさせる継続した指導を行う ②部活動を含む運動を楽しむ体力の向上を図る継続的な指導を行う ③新型コロナウイルス感染症対策を含めた、病気にかからず健康な生活を送るための知識とそれを実践できる力を身につけさせる指導を行う ④望ましい食習慣を身につけさせるための食育を充実させる ⑤それぞれの障害についての理解を通して、安全に生活することができる態度を身につけさせる ⑥学校管理下における事故・ケガの実現のため、教職員一人一人の安全意識を向上させ、学校全体で取り組む	体育の授業や体育的行事に加え、「特別支援学校における障害者スポーツ推進事業」を活用した体操教室を開催することで、運動を楽しみながら体力の向上を図ることができた。また、各授業における支援方法、教材の安全性、ヒヤリハットの情報共有に努めたことで、事故・ケガもなく、安全に過ごすことができた。一方、生活習慣、健康な生活、食習慣に関する指導については、児童生徒や保護者、寄宿舎指導員がA評価なのに対し、教員はB評価だったことから、今後も児童生徒の実態に合わせた適切な指導を目指し、指導力の向上に努めていきたい。	A	・コロナ感染者、事故・ケガもなく良かった。まだまだ、気を付けて頑張ってください。 ・事故・ケガのないことは当然に求められることですが、実際にはなかなか難しいことだと思えます。それにもかかわらず目標を達成できたことが、保護者のA評価に表れたと考えます。高く評価したいと思います。教員のB評価の内容について、十分な議論をつくり、次年度にのぞんで欲しい。 ・今年度は事故・ケガが発生することなく終えましたが、毎年度、安全に過ごすための情報共有に努めていただきたい。一つ気になったのは、生活に関する指導のみならず、全体的に教員の評価が低いということ。厳しく評価しているのこのなか、単純にできていないのか判別しにくい。 ・健康管理は社会に出てからも大切なことであるため、運動は今のうちから習慣にできるとよいと思う。 ・「具体的方策⑤」について、自身の障害理解、その上で安全を大前提として自立した生活を送る準備を教えて頂けることは大変良いと思う。 ・児童生徒の健全な心身の成長及び発達を目標に様々な体験や行事を企画、立案、遂行している教職員の皆様のご苦勞、伺い知ることができます。人が動いている以上、事故やケガはどうしても避けられないものではありませんが安全に過ごすことができたことは喜ばしい限りと思います。	一人一人の実態に合わせた生活習慣を身につけさせる継続した指導を行うことについては、教員の評価が低く、子ども・保護者の評価は高い。これは、目標を共通理解できていないことが一因ではないかと思われる。児童生徒の実態に合わせた目標を設定・共有し、家庭と連携、また、寄宿舎利用生については寄宿舎とも連携して一貫性・継続性のある指導を継続していくことができるようにしていく。 学校管理下における事故・ケガの実現については、今後も学校、寄宿舎で、環境の整備や見守り、安全に活動するためのルールなどについて職員間で共通理解を図り、事故・ケガの防止に努めていく。

2	<p>授業を充実させ、進んで学習に取り組む子・意欲的で主体性のある子を育てる</p>	<p>①主体的対話的で深い学びによる授業実践を通して基礎的・基本的な知識及び技能を習得させる ②普段の授業における言語活動(話し合い活動)を充実させる ③ICT活用推進員を指名し、ICTを活用した学習活動を推進する ④「できた・わかった」が実感できる授業づくりのために、授業のUD化や一人一人の障害や特性に配慮した授業を行う ⑤互いの授業を見合ったり授業研究会を行ったりして、授業力を向上させる ⑥探究心を持って学習する子どもの育成のために、子どもの興味関心を大切に指導を行う ⑦将来の社会参加と自立を目指し、子どもの可能性を広げるために、一人一人の将来を見通した指導を通して、子どもの興味関心を広げる指導を行う ⑧新型コロナウイルス感染症対策を行った上での集団活動・行事等を安全に実施する</p>	<p>ICTの活用に関する学習会や授業実践を計画・実施したことで、徐々に教員の意識が高まり、デジタル教科書、iPad、短焦点プロジェクター等を活用した授業が増えた。児童生徒も関心をもって取り組んでおり、保護者の期待も大きいので、今後も教員のスキルアップを図り、従来から行っている視覚支援の方法と合わせて、効果的な学習活動を目指したい。新型コロナウイルス感染症対策についても、随時確認し、安全な環境で学習することができた。一方、話し合い活動の充実、主体的対話的で深い学びによる授業実践については、一人学級が多い状況の中、どのように話し合い活動を保障していくかを具体的に考えていきたい。また、授業改善のためのPDC Aサイクル、お互いの授業を見合う体制作り、視覚障害教育を含めた特別支援教育の専門性の向上を図り、指導の質を高めていきたい。</p>	A <p>・1対1での授業で、児童生徒は特別言わなくても先生は分かって進んでいると思う授業では、出来るだけ発表させるようにし、学年を越えての複数での取組を進めてほしい。 ・第2回協議会の際に授業参観させていただき、とても良い勉強になりました。各先生方も困難な状況のもとで努力されており、私個人としては、とても強い信頼感を持ちました。今後とも、しっかりと頑張ってください。 ・一人学級が多いので、学年を越えての授業も取り入れても良いのではないと思う。多角的な考えや答えなど、それぞれ刺激となって思考が広がっていくでしょう。 ・ICTの活用について、慣れない中での授業の準備等、先生方は大変ご苦労されたのではないかと思います。 ・ICTの活用が促進されていくことにより、子供たちの可能性が広がることを期待している。 ・教職員の方々の創意・工夫に加え、様々な機材を活用して授業に取り組みされている様子が伺えます。また、児童生徒の各々の障害や特性、発達度に合わせて細密な授業計画及び実践をされていて、いつも素晴らしいと感じています。今後も児童生徒の学びの場での気付きを与え、興味関心を高め、延いては学習に対する自主性の向上に尽力していただきたいと思います。 ・ICTの活用が視覚障害者をどう変えることができるか。</p>	<p>主体的対話的で深い学びによる授業実践を通して基礎的・基本的な知識及び技能を習得させることについては、保護者、子どもの評価が低く、教員の評価も特に高いわけではない。そして教員は、子どもに基礎的・基本的な知識・技能を習得させるために、障害教育の専門性の向上を含む授業力・指導力の向上が必要との自覚がある。一方で、子どもの実態にあった基礎的・基本的な知識・技能を習得させることができたと考えている教員も多い。子どもの実態にあった目標や指導方法を保護者と共通理解できているかを検討し、子ども自身に教科等の学習における目標の達成感や成就感をもたせるため、保護者と連携しながら学習に対する自己肯定感を高める工夫をしていく。 ICTを活用した学習活動を推進することについては、ICTを活用した授業や教育活動が確実に前進しており、子どもたちもICTを活用することに対して積極的に主体的である。それぞれが試行錯誤しながらの実践を積み重ねていくことが課題解決につながるかと考える。</p>
3	<p>道徳教育・特別活動・生徒指導・自立活動の充実を図り、仲良く助け合う子・協調性のある子・豊かにコミュニケーションできる子を育てる</p>	<p>①道徳推進教師を中心とし、教育活動全般を通じて道徳教育を推進する ②多面的・多角的に考え議論する道徳科の授業を行う ③道徳科の授業と関連させた特別活動における体験活動を充実させる ④ねらい(つきたい力)を明確にした特別活動・行事等を実施する ⑤互いに協力して主体性が発揮できる活動や友だちの良さを認め、自己のよいところを見つけられる活動を工夫する ⑥特別活動や学校生活全般を通して、自分の意思(考え・思い)を適切に伝えられる手段を身に付けさせるようにする ⑦いじめの未然防止に向けて幼児児童生徒の居場所づくり・絆づくりに組織的に取り組む</p>	<p>いじめの未然防止に向けた学習を定期的な実施したことで、「学校はいじめのない安心できる場所だ」と認識されるようになった。 一方で、互いに協力し合うことや、自分の長所・短所を理解している子どもが少ないことから、様々な学習場面において、意識的に自己理解を深めたり、自己肯定感や自己有用感を高めたりする学習を設定し、協調性や豊かな人間性につなげていきたい。</p>	B <p>・上級生は下級生をいたわり、下級生は上級生を敬うという関係が出来たら良いと思う。昨年11月ボランティア活動に来た根城中1年生が、道路を歩いて来た小学生を見て、かわいい後輩だと言ったことばに感激しました。 ・道徳教育について専門の先生がいないのでしょうか。自信をもって、取り組んでいない様に見えます。大事なことです。頑張りてください。 ・取組が始まって日の浅い分野で、各先生ともご苦労なさっていると思われ。それゆえに推進教師に過度に依存することなく、それこそ教員間で多面的・多角的に考え議論しながら取り組むよう願っています。 ・子ども同士で物事の善し悪しを言い合える環境も必要なのではと思う。ただし、相手の受け止め方によっては意図しない方向へ向かう場合もあるので、先生方のフォローも大事となる。 ・学校が安心できる場所であることは、子どもはもちろんだが、保護者の立場として何よりありがたいことだと感じている。 ・自己肯定感や自己有用感を獲得できるかできないかで、大人になっていく段階、社会に出た後に大きな影響が出てくると感じている。学校での様子を保護者と共有しながら、ご家庭との協力体制を維持していければよいのではないかと考える。 ・物事の善悪の判断に加え他者の気持ちを推し量ることは生きていく上で欠かせない行為である反面、至難の業でもあります。ましてや児童生徒、当園では園児にそれを教育することは多大な苦勞を伴うことも理解しております。具体的な事例やその場でのやりとり(人間関係)を通して自分が受けた不快感を他者に与えないよう根気強く、また分かりやすく伝え続けるしかないように思います。 ・道徳教育が子供たちのいじめにどう関わっていくか。</p>	<p>「自分は、自分の長所や短所をよく知っている」という質問項目に対する児童生徒の評価が低く、自己肯定感は低いと考えられる。「自分にはいいところがたくさんある」と自信をもって大きくなってほしいという思い、自己の短所を含めて「自分は自分のままでいい」という自己肯定感を向上させる教育活動に取り組む。また、行事や特別活動においては、児童生徒に目標を持たせて達成感を味わわせている一方で、道徳性を育てたり自他のよいところを見つけたりという点では取り組みが不十分である。教員、児童生徒ともに、このことを意識して学習を進めることで、道徳性を育てたり、自他の活躍に気付かせたりするようにし、自己有用感の向上、そして自己肯定感の向上につなげていく。 いじめの未然防止については、次年度も、小さなトラブルでも分り次第全体で情報を共有し、いじめ防止委員会や校内教育支援委員会で検討し、組織的にかつ継続的に一貫性を持って対応していく。いじめの未然防止、早期発見・早期対応に努めていく。</p>

4	保護者及び地域の要請に応え貢献する学校づくり	<p>①各校に学校運営協議会を設置し、盲聾合同での学校運営協議会の実施と学校運営協議会を通しての保護者、地域住民の学校運営への参画の推進を通して、盲聾一体感のある学校づくりを進める</p> <p>②保護者に対して教育活動のねらい、内容及び結果について説明責任を果たし、連携して教育にあたることのできるようになる</p> <p>③地域における相談活動や支援活動を推進し、地域の要請に応え貢献する学校づくりを進める</p>	<p>保護者には、連絡帳や個別面談等を通して学習活動のねらいや内容等について説明し、共通理解を図りながら子どもの教育にあたることができた。また、地域における視覚障害を有する方たちのニーズに応じた相談活動を積極的に展開し、貢献することができた。一方で、学校運営協議会について、教員の理解が進んでいないことから、学校運営協議会の趣旨や、地域との連携・協働が教育活動の充実につながることを再確認するとともに、教職員の自覚を促すために、協議内容の事前の相談や会議内容の周知徹底を図っていきたい。</p>	A <p>・学校運営協議会については発足1年目であり、委員である自分もどの様な活動をするかつかめない状態ですので、先生方もそうだと思います。少しずつ理解を深め、良い形で学校が運営される様になればと思います。③について支援活動をよくしていると思います。学校所在地域での活動、一緒に出来ることがあれば一緒にし、地域での理解も深めて欲しい。</p> <p>・スタートしたばかりですから、あまり肩肘をはることなく、時間をかけてじっくり取り組んでいくことが何より大切だと思います。学校と地域住民（保護者を含む）の協働が基本ですから、地域住民の理解を得る学校の日常的な努力を期待しています。「はちもうだより」「学校だより」の活用など</p> <p>・運動会や学習発表会のアンケートを毎年行っているが結果の開示がない。他の保護者の意見や学校側の考えを知る機会となるものなので、保護者に知らせてほしい。</p> <p>・保護者として、先生と定期的かつ必要時に面談の機会を頂けるのはありがたいと思う。</p> <p>・常日頃より盲聾学校の地域のニーズに積極呈に応える姿勢に感心しております。児童生徒の健全な成長、発達のため、今後もあらゆる機関や人が各々の特色を生かしつつ綿密な連携をしていく必要があると思います。</p> <p>・盲聾合同の学校運営協議会が地域とどうかかわっていただけるか。</p>	<p>学校運営協議会については、十分に活用していくことが課題である。また、盲聾一体感のある学校づくりでは、新型コロナウイルス感染症のために、以前には盲聾合同でできていた活動が行えなくなったことなどが低い評価につながった。しかし、盲聾学校・聾学校が校舎内・寄宿舎内で一緒に生活していること自体が本校の強みであるともいえる。その強みを生かした学校運営を行っていく。</p> <p>保護者に対しては説明責任を果たしているが、上述のように指導目標などにおいて学校側と保護者とで一致していないと思われるものもあることから、個別の教育支援計画の活用や参観日等を活用し、これまで以上に十分に行っていくようにする。</p>
(11) 総括	<p>保護者、児童生徒、教職員による評価を4段階評価で実施した。保護者の評価が平均3.49、児童生徒の評価が平均3.35、教員が平均3.15、寄宿舎指導員が平均3.51、事務職員が平均3.58で、教員以外は到達度Aという高評価であった。課題となった項目や意見・要望については、各学部・分掌で改善策を検討した。特に教員については到達度がBであったことから、指導力及び専門性の向上を目指し、お互いの授業を見合うなどの方法で授業改善に取り組み、授業力の向上に努めていく。全職員で共通理解を図った改善策を踏まえ、次年度の学校経営方針の「重点目標と方策」を掲げる。各学部・校務部においては、これらについて、「学校教育計画」で「今年度の重点目標」として具体的に検討し、年度末に成果と取組を評価し、学校評価に反映させていく。</p>				